

なれば、科の概念は既成のものがあるという雰囲気は醸しかねず、その意味では、まだよく分かっていないということを、独特の体系で示すという意義はあるのかもしれない。しかし、一方で、植物名がしばしば変更されて困るという利用者の要望から、植物の統一名リストを作ろうとしている時代に、一般の利用者は無視して分類体系を研究する者だけが使えばよいとでもいうのか、無用の混乱を招くのはあまり賞められたこととはいえない。

具体的にいうと、シダ植物の科について、コバノイシカグマ科、イノモトソウ科、オシダ科が広義に取られているのに対して、オオフジシダ科、タマシダ科などが独立に扱われる。また、ヒメウラボシ科、コケシノブ科、ヒメシダ科などで、属が比較的広義に定義されるのに対して、ヒカゲノカズラ科、ウラボシ科などは細分説に依ってまとめられている。多数の著者が関与すれば多少の体裁の不一致は我慢しなければならないが、編集方針として、分類群の設定の方針は著者に任されていた。問題の在りかを直截に描き出すことをこそ意図されたというべきだろうか。それならば、読者ははじめからそのつもりで接しなければならない。この抄録でも、体系を頭から丸呑みにする利用の仕方をしない方がよいということをはっきり指摘しておきたい。

問題を現代的に捉えるきっかけとしては、示唆に富んだ論述が随所にみられる。元来、分類体系を論じる書は問題提起が最重要課題であり、その意味では本書の編集はよい成果をあげているといえるだろう。(岩槻邦男)

□中国植物志 第三卷第一分冊 i-x+306pp+77 pls. 1990. 科学出版社, 北京. 平装本 18元, 精装本 21元.

中国植物志のシダの部分は、1959年に第二巻が出て以来沈黙を続けていた。その間、文化大革命の時代に、秦 仁昌先生が準備しておられた2巻分の原稿が焼き捨てられるというような不幸な事件もあったと聞いている。久し振りに姿を見せることになったこの部分では、ワラビ科、イノモトソウ科(呉 兆洪)、ミミモチシダ科、ステノク

ラエア科、ヒメウラボシ科の大部分、イヌアミシダ科(邢 公俠)、ヒメウラボシ科の残りの一部(武 素功)、ホウライシダ科、ミズワラビ科(林 尤興)がそれぞれに示した著者によって著わされている。

秦 仁昌先生が亡くなってから、中国のシダ学者の間には、過度に細分された秦システムに反省が始められてはいるものの、本書の科や属の配列は秦システムに従ったものである。批判をする人はあっても秦 仁昌先生を凌駕して多くの人を納得させる修正を提議できる人はないということである。しかし、種の扱いについては、マレーシア植物誌と比べれば細分主義だといえるものの、それなりに分かりやすく、国際的な通念に照らしてもよく理解できるものになっている。日本のシダとの対応のためにも大変便利な書であり、中国の人達の研究成果が見事に結実したものといえる。残りの部分が順調に刊行され、1959年の第2巻が改訂されることを期待したい。(岩槻邦男)

□中尾佐助: 分類の発想 B6版. 331pp. 1990. 朝日選書. ¥1,300.

分類ということは社会のあらゆる面で行われている操作である。著者はそれを生物学の面で考えてみようとして異色の本である。分類学にとってはそれがかなりの比重を占める研究手段だから、その基本的な論議がなされなければならないのだけれど、今迄そのような論議は殆どされたことがなかった。問題を提起するだけでも意義のある試みである。著者は分類を類型分類、規格分類、系譜分類に大別し、それ等を総合したものを動的分類と呼ぶ。こうした概念を基に生物学の様々な事象を例として解説している。著者の関心は生物学だけでなく、人類学、言語学から宗教にまで及び著者の興味の広さを思わせ、私のようなその方面に門外漢のものには面白く読ませる所でもある。折角の中尾氏の貴重な提案だから、それを批判することで今後の実りのある発展を期待したい。

著者は分類という言葉を非常に広い意味に使っているのにとまどいを覚える。自家不和合は雌しべが花粉を類別することによるが、これをアイデンティ

ティと呼んでいるので認識か識別かと思うと、これも分類であるとしている。複数の物事を個々に認識し、それを記述し、記述したものの比較から分類が始まると思う。分類学で言う identify は鑑別または同定のことで、分類 classification とは異なることだと思う。

類型分類、規格分類、同格分類に分け、計測できるものを規格分類として、後者が高度な分類と思い違いするのは愚かな発想だとしながらも、遺伝子やDNAなど計測に載りうるものの有効性を述べている。分類の基準となる形質には計測できるものできないものがあり、計測できるものも分類の基準のひとつであって、これも類型による解析のひとつの手段と考えるのだが、類型の意味が違うのであろう。DNAにおける塩基の配列を比較して区別するのも、計測に乗り得ても類型分類と本質的に異なる。形態を基準にした場合は多くの遺伝形質の総合として現われた基準であるから、その範囲に不明確さが残るのはやむをえないが、総合である点が有利である。遺伝子やDNAによる基準は現在の所、比較的少数の遺伝形質の反映だから、人による解釈の差の入る余地が少なく、正確な理論化しやすい基準が作られる点で有利である。しかし、ごく一部の現象の把握でしかないから、将来DNAの構造が十分に解明され、それと形態を形づくる蛋白質の形成過程の関係が明らかにされるまでは、形態による基準を基礎に置かざるをえないであろう。分類の操作の精度の問題であって、類型分類と規格分類と同格に分けて論じるのは不適當と思う。類型と言う言葉の意味を明確に定義して話を進めることも必要である。

系譜分類は従来から使われている系統分類と同じ意味であろう。系譜分類の例として引用されているものは系統に関係するものばかりだからそう考えられる。新しい言葉を提唱する必要があるなら明確な区別をしてそれに定義づけを行うべきである。この内容は時間の概念が入る点で類型分類とは全く異なるレベルの概念だと思う。空間と時間、運動の問題は哲学の基本的な課題なので、私が口を出すようなことではないが、分類という操作が行われると同時に、そこには時間がからんで

くるのである。特に生物の分類では意識するしないに拘らず時間が入りこんでくる。この場合は歴史と置き換えてもよい。分類の中に含める概念ではないであろう。たまたま進化論以前の分類学とそれ以後の分類学とを区別するために作られた系統分類という言葉が現在でも使われているため、それに影響されたのだと思うが、系統は分類とは別個に考えなければならない概念と思う。

動的分類は類型分類、規格分類、系譜分類を総合したもので将来が期待されるとしている。言葉は同じでも貧弱な内容しか持たなかった早田先生の動的分類とは異なった内容である。早田先生の動的分類は研究の途中の思い付きからできたもので、研究の結果から作られたものではない。したがって具体的な裏づけを欠いていて、其後発展しなかったのは当然である。思い付きからそれを具体的な研究へと進めたら、先生の因子配分説は現在のジーンプールの理論と関連づけられるまで発展したかもしれない。しかし出発点で誤っているので進化を否定する方向に向かった。中尾氏の動的分類はそれとは異なるらしいからこれに異義を挟む必要はないけれど、早田先生の動的分類を持ちだすなら、その内容を吟味した上で使ってくれないと、余計な混乱を起すことになる。どのような研究でも総合を目指して行っている筈である。簡単に総合ができないから不十分な段階に留まっているにすぎない。氏の動的分類の具体的なイメージは私にははっきりしない。総合と考えてもよいことわっているが、それならなにも目新しい言葉を持ちだす必要もない。

著書では分類という言葉とその時によって幅広く自由に使っているが、学問的に分類の問題を議論するのだから、その辺はもっと厳密にしてもらわないと議論にならない。先にも述べたが分類というのはひとつの操作である。それに依って得られた分類群 Taxon とは別のことであることは言うまでもない。しかしこのことは言葉で言えば誰でも認識しているであろうが、議論される際には混同して行われることが多い。この著書もその区別が明確であるとはいえない。分類学は分類された Taxon の持つ性質を明らかにすることにある。しかしその基礎となる Taxon の定義が重要であ

り、人によって異なる見解もでてくるので、その定義にかなりの比重をかけるのが普通である。またある程度定義づけられた Taxon を解析することから逆にその定義が変更される場合もある。そこで手段と目的が混同されることにもなるのだけれど、分類という操作と Taxon の持つ性質を説明する目的とは別のものである。分類の言葉がそうであるように、著書にでてくる類型や規格も私の理解とは異なるらしいように感じられる。他人に解るようにものを書くというのは難しいものである。

この本の中には著者が専門とする農学の中からの興味ある多くの問題が紹介されている。専門外の植物分類学の引用例の中には、取り上げて議論するものどうかと思われるものがあるが、著者が専門外であることからすればやむをえないかもしれない。用語の内容を正確に吟味して、農学の事実の中から問題を発展させれば、さらに意義のある問題提起になると思う。

余談ではあるが、著者の学名のつけかたに対する理解は主に動物学での方法であって、植物学での理解が欠けているのではないかとと思われる。このままでは読者に誤解される恐れがあるので解説を付け加えておきたい。この本では学名の付け方を次の様に説明している。亜種は種の中で大きい変異が遺伝的に備った集団で、小さい変異は変種であるとしている。亜種は遺伝的特色を持ち、他の亜種と互いに隔離して生活する集団と規定される。変種は亜種に見られる生態学的システムと異なり、単位集団の中に見出される変異でジャンプに帰属するものと見なされるとしている。ただ一つの亜種の中にさらに特色を持つ小集団がでてくることがあるが、現在ではそれには名のつけようがない。こうした第二亜種、第三亜種ランクを設定する必要があると述べている。これは大体動物で行なわれている命名の方法だと思う。動物学と植物学とで命名の方法が異なることは知られるところである。植物では動物の亜種に当るものを総て変種として扱ってきた。それは De Candolle 辺りに始まり、Bentham, Hooker, Engler と次第に完成されてきた方式である。

最近に変種だけでは Taxon の実態を的確に表

現しえないという考慮から亜種概念が導入されてきた。しかしこの導入がまだ新しいこともあって、亜種の扱いは人によって異なり共通の規定ができていないのが現状である。一般的に言えることは、種の中には集団としてよく纏まり、あまり変異の認められないものもあれば、多数の変異集団があって分類の難しいものもある。多数の変異集団を抱える種については、大きな特徴で分類する遺伝的にも地理的にも異なる集団を亜種とし、その分布範囲内でさらに遺伝的にも地理的にも区別する小集団を変種とするのがおおよその亜種、変種の扱いである。この場合植物で言う変種は中尾氏の言う第二亜種に当る。中尾氏が定義した変種は植物では品種に当るものであろう。亜種と変種をどのようにランク付けるかの技術的な問題があるが、最近の詳細な種間、種内分析の手法からすればそれほど面倒なことではないであろう。植物学ではこのような扱いが大筋だと思うし、動物学での学名方式より、より実体に適合した Taxon を表現できる点で優れていると思う。しかし動物学の方式にならう人が増えているのも事実である。ヨーロッパの学者にその傾向が強い。生物には同じ基準で学名が付けられるのが望ましいが、性急に行うのは混乱を起すだけである。(山崎 敬)

□田澤伸雄編著 北海道昆布漁業史 414pp. 1990. 私費出版。

北海道における昆布漁業の歴史を扱った書で、徳川時代、明治時代、大正・昭和前期(戦前)および昭和後期(戦後)のそれぞれの時代において、昆布の生産状況、保護と増殖事業、漁家の経営・経済、昆布製品の流通・経済等がどのようなであったかを資料を中心に述べている。徳川時代初期に本州から渡来した人々が北海道の交易独占権を得ることにより本州との主要交易品として昆布の採取が盛んになったこと、当時の昆布採取は太平洋沿岸が主で、日本海沿岸やオホーツク沿岸では行われなかったらしいこと、中国への昆布の輸出は既に1600年代初期(徳川中期)に行われていたことなど、興味をひく記述が随所にある。昭和38年以降絶えることなく続けられるソビエトとの貝殻島周辺の昆布採取に関する協定、その頃行われた